

AA スクールの内容については、以前に本誌(1993年7月号)で紹介されており、ここではその重複を避け、AAの建築教育がユニークと言われているのはなぜか、その意味は何なのかを、創造性に関する設計プロセスという観点から考察する。

ユニットシステムと幅広い建築の捉え方

AA スクールの特徴を考えるうえでまず重要なのは、ユニットシステムである。これは、建築家の師弟関係からヒントを得た方法で、10~15人の学生と、1、2人の教師からなるユニット(研究室、スタジオ)が学校内にくわく用意されており、ユニット独自のプログラムで建築教育が行われるシステムである。従って、各ユニットごとに教育プログラムはまったく異なっており、これがユニークな教育と言われるゆえんであり、同時に一律では語れない複雑さにつながっている。年度始めに行われるプログラム説明会で、各学生は自分の気に入ったユニットを選び、面接を受けてパスすればそのユニットの学生となる。つまり、学生とユニットが選び合った関係において建築教育が行われるのである。1971年にユニットシステムを始めた学長A.ボヤスキーによると、建築の多面的探求の必要性和学生の創造性を最大限に開拓するためにこのシステムを導入したとしている。最近、ユニットシステムの利点に注目し、東ロンドン大学やロンドン大学バートレット校、北ロンドン大学など取り入れる学校が増えている。

次にあげられる特徴は、その幅広い建築の捉え方である。各ユニットの教育プログラムを見てみると、現状調査により建物を具体的に提案するものから、住宅供給の調査からコミュニティの在り方や住宅政策の

提案を行うもの、映画や音楽を通じて物語を作りそこから空間につなげるもの、神話を手掛かりに心と場の関係を探求するもの、建築の意味そのものを問うやや哲学的なものなど、具体的な建物のみならず、概念的、抽象的なものまで幅広く扱うのである。つまり、建築を多義的に捉えているため、教育プログラムの目的も多彩であり、他の多くの学校で見られる具体的な建物の設計を目的とした課題は、その多義的な建築の中の一つの在り方としている。この建築の幅広い見方・捉え方が、AA スクールがユニークであることの理由の一つであり、その可能性の中で学生は創造性を十分に開拓することができるのである。

アンコンベンショナルな設計プロセス

次に、この幅広い建築の捉え方から設計のプロセスを見てみると、一般的な設計プロセスも多様な設計プロセスの中の一つの在り方と言える。従って、ここでは一般的で慣用的な設計プロセスにとらわれない自由な発想の中から得られる非慣用的な設計プロセスを「アンコンベンショナル設計プロセス」と呼ぶことにする。

実際の設計行為の中で一番需要が多く慣用的な設計プロセスとしてあげられるのは、最初に敷地と建てるべき建物の種類と規模があり、そこから設計条件や問題点を整理し、それらを満足するように設計する方法であろう。もちろん、これにはこの変形タイプを含めいろいろなバリエーションがある。一方、そうではないアンコンベンショナル設計プロセスとはどのようなものなのか。例えばその逆で、最初に建物がありそこからインスピレーションを得て設計条件を設定し敷地をデザインしていくとか、設計のコンセプトを得るために町をブラつきそこで偶然出会った出来事の中からヒントを得てそれを発展させ何かを設計するというプロセス。このような場合、建物を設計するのが直接の目的ではないため、成果物は概念的なオブジェやインスタレーション、パフォーマンス(=写真)になるかもしれない。また目的が最初には存在せず、目的を見つけるために様々な探求を行うという設計プロセスというのもありうるし、プロセス自体を探求するためにいろいろ

ろな実験を繰り返すという設計プロセスもあろう。ここまでくると、目的・方法・結果の関係がその理由や原因という意味において客観的には分かりづらくなり、これは建築設計ではないと言う人も出てくるであろう。AA スクールでは、各学生の設計プロジェクトの方向により、様々なタイプのアンコンベンショナル設計プロセスが許され、試され、開拓されているのであるが、これがユニークな建築教育の一理由であると同時に、慣用的視点からは理解しづらい点でもある。

設計プロセスと非因果関係的思考

慣用的な設計プロセスで重要とされるのは因果関係であり、科学的思考が要求される。例えば、敷地の広さ、形状、高低、気候、周囲との関係といった特性を正確に把握し、複雑な設計条件を巧みに整理していく、他の類似事例等も含め深く分析して問題点を明らかにし、その解決策を考察する。加えて、美観等を考慮しつつ設計者の思想や嗜好を入れながら設計していく。時には、思想や嗜好についてクライアントが十分に納得できる客観的根拠が要求される。つまり、すべてにおいて因果関係が重要なのである。一方、アンコンベンショナル設計プロセスにおいては、むしろ因果関係で説明がつくものより、そうではないものの関係が重要になってくる。つまり、やや非科学的なものである。閃きや体験的なもの、偶然性、同時性、並列性といったものがプロセスの原動力であり、その成果物は隠喩的、象徴的、詩的、建物的、神秘的なものとなり、いわゆる建物でないものまでそれに含まれてくるのである。従って、この設計プロセス全体を因果関係からだけでは明快に説明することはできず、むしろどこでどのように非因果関係的に転換したのかその特徴を見るうえで重要になってくる。

これを設計の質や評価という軸で捉えてみると、前者はいかに正確に現状を把握し、そこでの条件や問題をいかに客観的に分析し巧みに解決しているか、そして設計者のアイデアや嗜好がいかにうまく付加価値として反映しているかというのがポイントとなってくる。一方、後者の方はいかに



AA スクール校舎前でのパフォーマンス、偽物のチャールズ皇太子を使った「FAKE & REAL WITH LONDON TAXI」というプロジェクト



1956年京都府生まれ/多摩美術大学卒業/東京都立大学大学院修士/巴川藤工所建築設計部/AAスクール大学院修士/建築家、設計教育



RIBA主催、卒業設計展1993年の案内

独自のフィルターを使って現状を丹念に捉え、独自の体験の中からどのような意外性のあるものを発見しているか。そして、それをどれだけ深くダイナミックに発展させ、成果物として力強く魅力的なものに転換しているか、というのがポイントになってくる。つまりこれは、前者において「正確性、客観性」が常に評価軸の中心にあるのに対し、後者は「創造性、主観性」がその軸の中心となっている。もちろん前者においても創造性は大変重要であり、後者においても正確性は要求される。ここで意味するのは、それが優先されるということである。

AAスクールの建築教育には、学生のプロジェクトの内容により様々な設計プロセスが実験され開拓され、結果として出てくる成果物も多様であり、そこでのクライテリアには、この一見矛盾するような両者の観点が並存しているのである。

心理学から見た創造性

心理学者エンゲル (1875-1961) は、「創造性とは無意識の世界から意識の世界へある対象を動かすエネルギーである」、つまり無意識にあるものを意識化する作業として捉え、この創造のエネルギーを使って、心の病を人間の自己治癒力によって克服することができ、さらには「創造的自己実現 Creative Self Realization」を達成することができると考えた。彼はこの過程を「個性化のプロセス Individuation Process」と呼

び深く研究した。この方法について彼は、作業や遊びの中から得られる直接的な体験の重要性を、夢や連想等から得られる「心像 Image」や「象徴 Symbol」を取り扱うことの重要性をあげている。ここで彼が特に強調しているのは、世の中には因果関係において生じているものと非因果関係において生じているものとが存在し、これら直接的な体験や心像の読み取りにおいては、非因果関係的な考察が大切であるとしている。例えば、夜尿症の子供が壊れた洗濯機が修理された時期からおねしょをしなくなったとか、数学者が美しい曼陀羅模様の夢を見た日に難しい数式を解いた等の関係である。彼は、この不思議な関係を多くの事例研究を通じて「意味ある偶然性 Meaningful Coincidence」や「同時性 Synchronicity」という概念で説明している。創造性という観点で設計プロセスを考える時、彼の非因果関係的思考には興味深いものがある。

心理療法の原則において、治療者とクライアント (患者) には、一定の契約関係 (フレーム) を必要としている。これは、治療時間を区切ることや治療者との関係をあらかじめ決めておくことによって、クライアントの無意識を扱うエネルギーが意識の中にある自我すなわち理性を必要以上に刺激しないようにしているのである。つまり、無意識の中に押し込められていたコンプレックスを創造力というエネルギーで十分に表出させ認知するためには、意識の中にある理性を同時に強化することが必要なのである。すなわち、非因果関係的思考を採る時に因果関係的思考が基本的に備わっていることを条件としており、この二つのバランスの重要性が感じ取れるのである。

これら心理学における創造性の考え方や因果関係的思考と非因果関係的思考には、創造性の設計プロセスを考えるうえで多くの示唆がある。また私には、心理療法における治療者とクライアントの契約関係が、AAスクールでのユニット内での教師と学生との選択し合った関係 (契約) や教育プログラム (フレーム) とに重なり合い、その中において、創造的な設計教育が行われているように感じるのである。そして、AAスクールには因果関係的思考と非因果関係的

思考の微妙なバランスがあるように思えるのである。

多様な設計プロセスと設計教育

建築設計教育において設計プロセスを見てみると、一般に多くの学校では慣用的な設計プロセスをもとにして教育がなされており、作品の評価についてもそれをもとにして思うように思う。ロンドン大学バートレット校の建築学部長 P. クックに建築教育に関してインタビューをした。彼は設計プロセスについて一義的な解釈はまったくしておらず、設計プロセスは元々多様なものであり、設計行為の中で様々なプロセスが発生するのである。従って、慣用的な設計プロセスとは、その中のごく一部であるとしている。実際、バートレット校の最近の作品の傾向はバラエティに富んでおり、概念的、抽象的なものも多々、いわゆる建物の設計は見つけるのが難しいくらいである。AAスクールはずいぶん前から設計教育、設計プロセス、その作品において実に多彩であり、他の大学でもこの傾向が講習会等を通じて感じとれる。この捉え方とクライテリアについては、RIBA主催の卒業設計展からも十分に読み取ることができ (一〇〇)。もちろん、これらの学校における教育システムにはある特徴が見られ、知識を伝える場としての講義・科目の比重が比較的小さく、設計教育を中心としたカリキュラムとなっており、学生に考えさせる場、体験させる場としてのゼミやチュートリアル (個人指導)、ジャーナル (講評会) が重要視されているのである。

この差異を考えるうえで、建築学科がどの学部には属しているかということや学生に対する教師の数などの理由以前に、設計教育において「個性や創造性の開拓」を「建築知識の充足」や「設計技術の修得」と併せてどのように捉え、どのように指導するのかという根本的な問いかけが重要なのではないだろうか。私には、AAスクールのユニークな建築教育が「建築技術者を育てる教育かあるいは建築家を育てる教育か」、または「納得させる建築をめざすのか、あるいは心を動かす建築をめざすのか」という問いかけをしているように思えるのである。